



二松学舎大学
父母会報

平成5年5月10日創刊
平成23年3月31日発行
(第72号)

二松学舎大学父母会

(本部)東京都千代田区三番町6番地16
(事務局)千葉県柏市大井2590
〒277-8585 TEL.04(7191)8756

二松学舎大学柏事務課

題字は
故 観山貞廣常吉先生書



卒業を祝す

父母会長 桐原利之



卒業生の皆様
おめでとうございます。
葉を帝国ホテル
の卒業パーティ
でもう一度言いたかったです。未曾
有の大震災ということではありまし
たが、楽しみとされておりましたで
しょう卒業パーティを中止せざるを
得なかったこと心よりお詫び申し上
げます。特に私も含めて四年生の役
員は何とか挙行出来ないかとぎりぎ
りまで悩みぬきました。父母会とし
ましては、パーティ費用を、①皆様
に卒業記念品として還元する ②震
災の被災者の皆様に今年の卒業生一
同として義援金を送る ことにしま
した。御理解をお願いいたします。
さて、非常に悔しいですが、今
年度の卒業生は史上最悪の就職内

定率だったと記憶される学年にもな
ってしまいました。
異例ですが三つに分けて励まし
の言葉を述べます。
・まだ内定がない方々：人生九十
年時代、勇気と希望を持ち、今に見
ておれ」の精神でこれはという仕事
を見つけてほしい。結果で勝負です。
・自分に適した仕事に巡り合えず、
やや不本意な仕事に挑む方々：「今
の仕事を一生懸命やることで、次
やるべきことが見えてくる。」とい
う言葉を贈ります。経験で無駄にな
ることはないと思っています。
・自分の希望の仕事につけた方々
：三つの社会人基礎力、①一歩前に
踏み出し、失敗しても粘り強く取り
組む力、②疑問を持ち考える力、
③いろいろな人とともに目標に向け
て協力するチームで働く力 これら
を身につけてほしいと思います。
そして、いずれの方々にも二松学
舎で学んだという共通の「縁」、ネッ
トワークを大切なよりどころとして
いつてほしいと念じています。部活
ゼミなどで培った交流をいつまでも
持続させていってください。
末筆ですが、卒業生の御父母の皆
様、お子様のご卒業おめでとうございます。
また、本学教職員の皆様お
世話様でした。ありがとうございます。

学は一生の大事

学長 渡辺和則



卒業生の皆さんは厳しい就職活動をして「人生行路難し」を実感したことでしょう。皆さんの人生行路は始まったばかりです。ここで挫けてはいけません。江戸時代の学者佐藤一斎の『言志

晩録』の第六十条に、次のような言葉が見えます。
 葉が見えませぬ。
 少くして学べば、則ち壮にして為すこと有り。
 壮にして学べば、則ち老いて衰えず。
 老いて学べば、則ち死して朽ちず。

卒業生の皆さんにとって励みになるのは「少くして学べば」の文章で

頼め。

という言葉が見えます。これは、強い意志と向上心を持って自分の人生行路を歩んで行くならば、何も心配することはない、自信を持って歩んでいけばよい、という意味です。壁に打ち当たり、挫けそうになったときには、この言葉を思い出してください。

卒業生の皆さんの健闘と幸せを祈っています。ご卒業おめでとうございます。

卒業生に贈る

理事長 大山徳高



卒業生のみなさん、おめでとございます。大学生として十二分に研鑽を積み、社会へ飛び立っていかれるみなさんに、心よりお祝い申し上げます。また、生涯を通し人格を高める志を待ち続けるとともに、社

会人としての責任を自覚し、明るく社会の実現に尽力していただきたいと願っております。一日一日を大切に過ごすことがその道に通じるものと思います。

その一つとして、多くの人は、一日の大半を仕事に費やすものだと思います。「仕事」が一月また、一年の大部分を占めているのが一般的な人のあり方だと思えます。自分を高め、

しよう。これは、若い時によく勉強しておけば、壮年(三十歳以上)に達してそれが役立ち、何事か為すことができる、という意味です。

皆さんは四年間一所懸命に勉強をしたと思います。しかし本当の勉強はこれからです。三十歳までに将来の仕事に必要な勉強を済ませておく必要があります。それは皆さんの人生行路の基礎を築くためのものです。三十歳までは、それに打ち込む気力と体力が備わっています。『言志

晩録』の第十三条に、
 一燈を提げて暗夜を行く。暗夜を憂うること勿れ。只だ一燈を

自己実現を図るのが人生だとしたら、一生の大部分を占める職業を通じて研鑽するのがよいだろうと思います。よい仕事をするための創意工夫は、仕事の結果のみならず、人格を高める上でも大切なことと考えています。

最近、就職して一、二年の内に転職をしてしまう若者が多いという報道を見聞きします。身を置いた所で、まず、しっかりと取り組んでみる。

さまざまなことがある程度、理解できるまで我慢しないとけないと思います。生半可な状態で投げ出さないことです。「石の上にも三年」と昔の人は言いましたが、そのくらい

新たな門出に

文学部長 江藤茂博



ご卒業される文学部の諸君、おめでとうございます。四年間の学生時代、さまざまな出来事があったことだと思います。それでも、新しい一歩がまた始まります。この不透明な時代、これから何が待ち受けて

いるのか全く予想できません。社会に踏み出すにあたり、喜びもあるでしょうが、不安もまた大きいかもしれません。でも、いつの時代も、さまざまな出来事が起こり、社会は揺れ動き、時代に透明感などはありませんでした。だからこそ文学はいつも新しく生まれ変わり、ひとびとは文学を読み続けてきたのでしょうか。たとえば、巧い船乗りとは、風や波の

今年度「四年ゼミ」卒業生に贈る

国際政治経済学部長 鈴木朝生



卒業生の皆さん御卒業おめでとうございます。今年度は私のゼミからは、この就職難の時代にありながら、いずれも何とか生活の糧を得る手段を見つけ、三名の学生が卒業します。この六年間、学部長の職に

あつて、大学行政を言い訳にするのも情けない話ですが、とくにゼミについては、お世辞にも、自信を持って充実していたと言えるものではありませんでした。ゼミ生諸君には、私と与えられるわずかなものの中で、さらにわずかなものしか与えることができません。申し訳ない気持ち一杯です。私のゼミは、少人数でならず国際

気配で、正しく進路を見極めることができるものだと思います。そうした巧い船乗りとしてあえて荒波に向かう君たちもいれば、穏やかな日のにんびりと船を出す君たちがいてもいいでしょう。たとえ船乗りであつても、歩くことや飛ぶことを考えてもいいかもしれません。とらわれてはいけません。大学を卒業したこれからは、皆それぞれです。学年もなければ、学校もありません。正せない誤りも無ければ、絶対だという正解もありません。君たちそれぞれが手に入れた優れた見地で、人生を豊かに切り開いてくことだろうと、私は

政治経済学部ゼミの中でも、とくに小さなゼミですが、私はこれはこれで適正規模だと考えています。私のゼミは、俗に「よく学びよく遊べ」と言いますが、「学び」はもちろんのこと、よく「遊び」もしました。ゼミ以外の日にも、「新入ゼミ生歓迎会」、四年生の就職が決まった「お祝い」等、それ以外にも、何のかんのと口実を作つては、待ち合わせて、夜遅くまで飲み歩き、また数年ぶりで、四年生の追い出しを兼ねた「ゼミ合宿」を復活できたことは、よい思い出になりました。

とくに大学における「教育」とは、

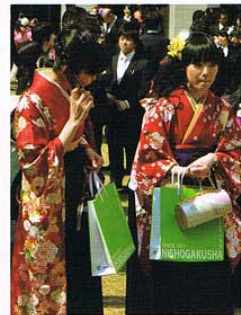
は我慢しなければならぬ。真剣に取り組んだ三年は、決して無駄にはなりません。自分を鍛えるうえでも、大きな収穫になります。自分を鍛え、自分を高めることは、社会へ貢献するための一歩でもあります。説教じみて誠に恐縮ですが、卒業生に贈ることばとします。ご健康とご多幸をお祈りします。

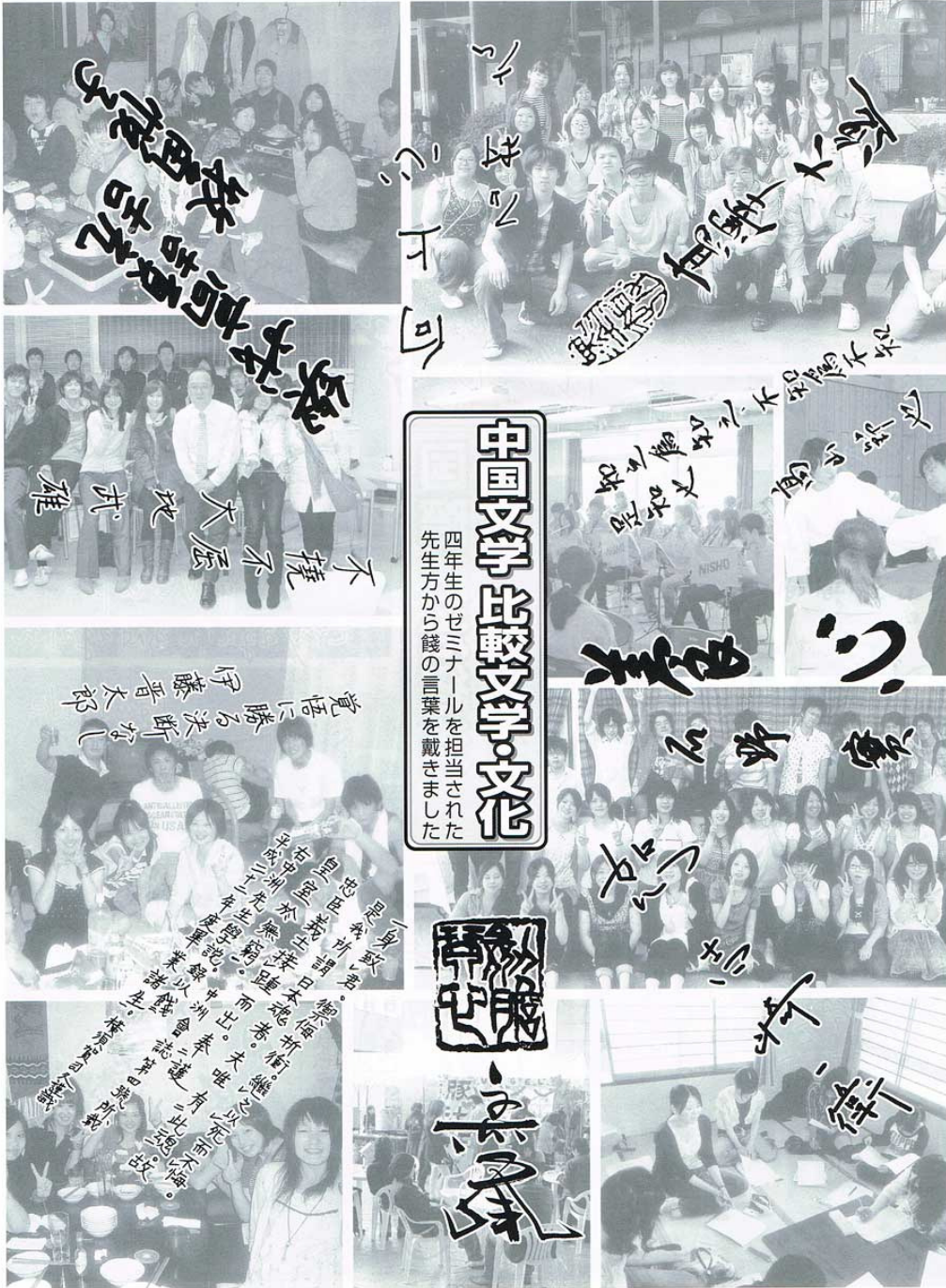


確信しています。生きることは、表現することだと、文学部の知は君たちに教えてくれた筈です。これから社会参加するにあたり、自分らしさを十分に表現できる人になつてください。そして、これまでのどの自分にもこだわることなく、いつも自分らしい人生を歩んでもらいたいと思います。



教員・先輩・友人、また時として仲間・後輩から「教わること」を契機や触発材料とする、「自己教育」である以上、教わったことの中で何を活かせるのかは、結局のところ自分身に掛かっています。その意味で、ゼミは大学の中でも勉強の場を中心にした人間トータル交流の場の中心であり、それこそゼミの重要な要素であることは、ほるか今から数十年前の私の学部生時代を振り返つて、いまさらながら痛感した次第です。二松学舎が彼らにとって「来てよかった」と思える大学であつたと確信してやみません。

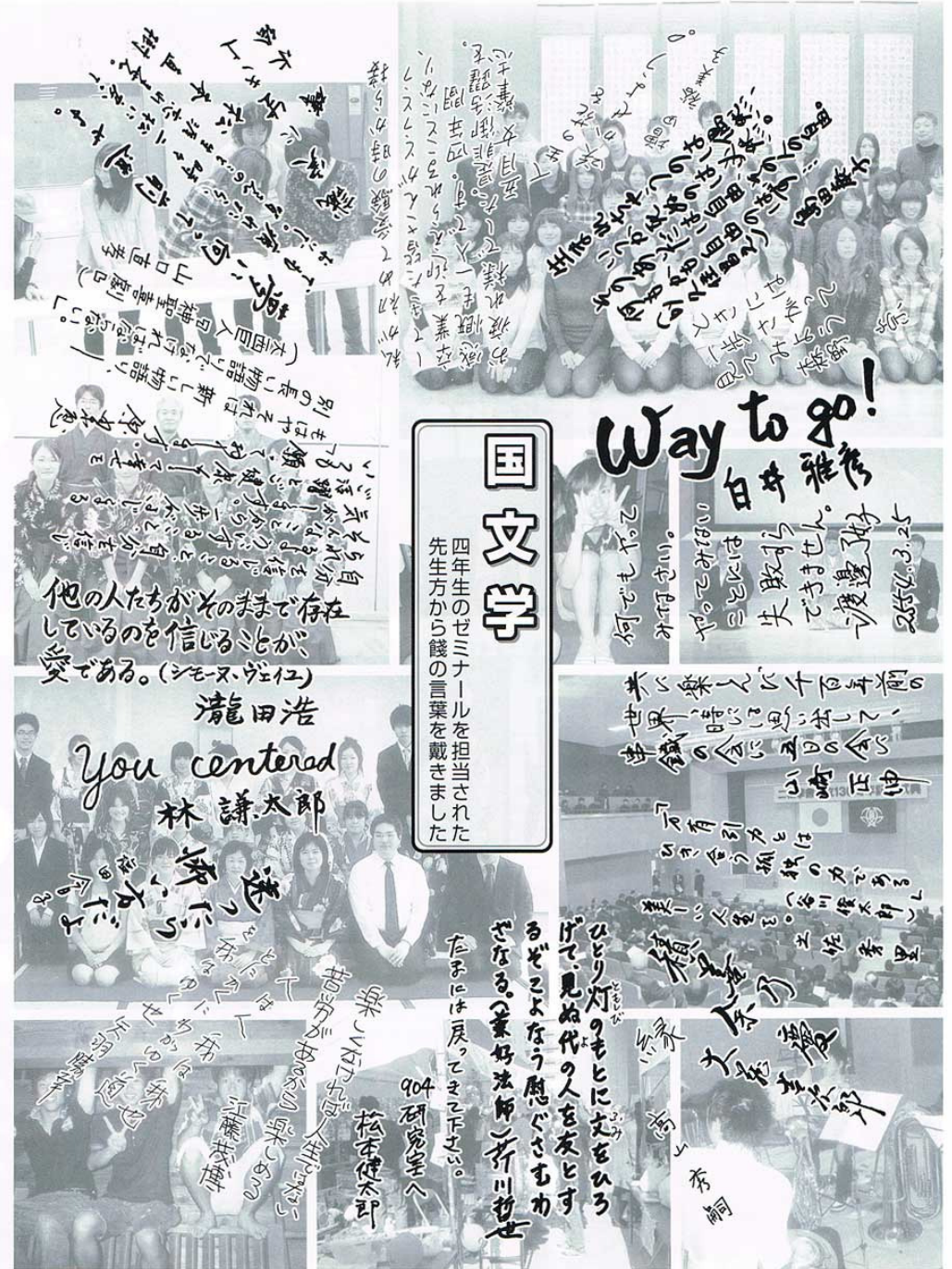




中国文学は戦文学・文化
 四年生のゼミナールの言葉を担当された先生方から饒の言葉を戴きました



不撓不屈



国文学
 四年生のゼミナールの言葉を戴きました

Way to go!
 白井雅彦

You centered
 林謙太郎

904 河原室へ
 松本徳太郎

大学生活は驚くほどあっという間だった—というのが今の心境です。この四年間、私は友人や仲間、指導して下さる教授に恵まれた中で、自分の学びたいことに取り組むことができました。

私が二松学舎大学への進学を決めた理由は日本語教員養成課程修了証を取得したかったからです。中学校高校と短期の留学やホームステイを繰り返すなかで「海外から見た日本の姿」に興味を持った私は、「一番身近である「日本語」を客観的に学ぼう」と思いました。二松学舎大学の「日本語教員養成コース」のカリキュラムの中には実際の日本語学校での教育実習も含まれており、内容がとて



文学部国文学科
村岡 加緒里

も充実しているのでは、と期待を胸に入学を決意したのです。

一年次の基礎ゼミは五井信先生にご指導頂きました。一年生のうちは必修科目や基礎科目を重点的に履修したため、専門的な分野を学ぶ余裕はありませんでしたが、二年生や三年生になるにつれ、日本語や言語、文化などの興味のある分野についてより深く学んでいくことができました。自分の学びたい講義も多くなりました。自分だけの講義ですが、それと同時に「日本語を学ぶ」という事は予想以上に大変なことであると実感しました。

私たちは普段無意識に日本語を話しているため、どういった規則で日

本語が成り立っているのか、どのようなか部分が難しい仕組みになっているのかなど、考える機会すらありません。まるで空気のような存在の日本語を意識して見つめなおすことから、私の勉強は始まりました。日本語に関する講義を受けていく中で一番初めに気づいたことは、「日本語が話せる≠日本語を教えられる」ということです。今となつては当たり前前にも思えるのですが、専門分野を学び始めたばかりだった大学二年生の私にとつては最初の壁でした。まず私に必要なつたのは日本語に対する姿勢だったのです。「自分は日本語について何も知らない」と痛感し、しっかりと一から学んでいこうと思ひなおしました。

二年次には日本語の初級テキストで文型中心の二〇分程度の模擬授業を数回、三年次には中級テキストを使用し実際の文章や物語を使って五〇〜六〇分程度の模擬授業を数回やりました。そして四年次の夏休みには今までのまとめとも言える日本語学校での教育実習がありました。同年代の人たちが日本という異国で奮闘している姿や、学生たちと信頼関係を築きながら働いている日本語学校の先生方の姿はとても印象に残っています。総括とも言える教育実習を無事に終えられたのは一緒に学ん

できた友人たちがいたからこそ、です。この授業を通して出会った友人たちには本当に感謝しています。課題や授業準備などで大変な時期もあつたけれど、直した指導案の数枚だけ、こなしした模擬授業の数だけ、費やした時間の分だけ、少しでも成長できたのではないかと思っています。

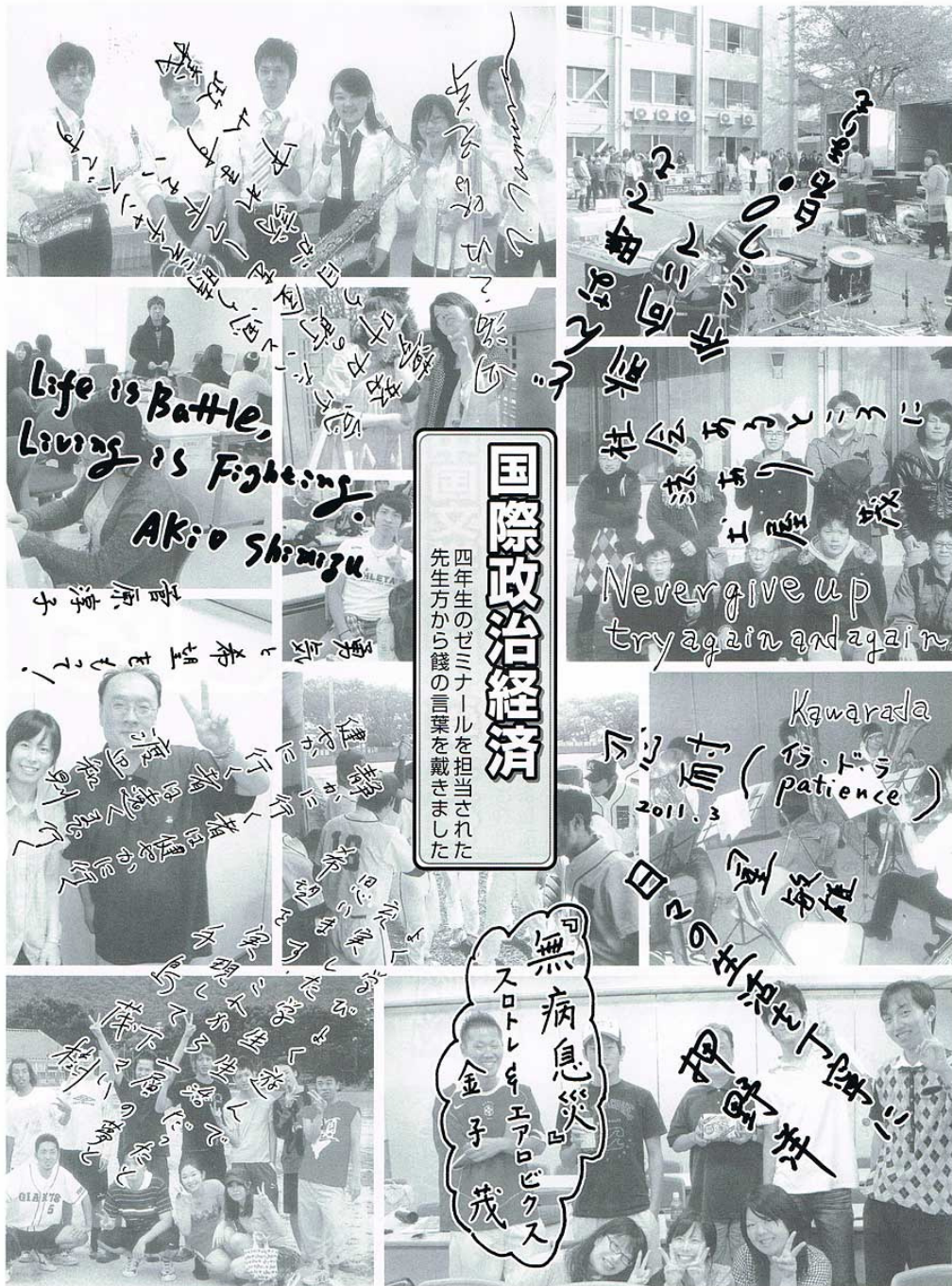
三年次、四年次のゼミナールは渡邊好先生ご指導のもと、コミュニケーションについて学びました。そしてこういった方面に興味を持ったそもそのもきっかけである「留学」について、「日本における留学事情の実態」と題した卒業論文を書き上げることで大学生活を締めくくることができました。

振り返れば学習面はもちろん、生活面でもとても充実した四年間を過ごすことができたと思います。それもすべて、一緒に騒いでくれる最高の友人たち、ご指導くださった先生方、そして支えてくれた家族のおかげだと思っています。基礎ゼミや卒業年次のゼミナール、授業で知り合った友人や先生方との出会いは本当にかげがえのないものです。

二松学舎大学で経験したこと、学んだことを糧に、春からはひとりの社会人として気持ちを新たに頑張っていこうと思ひます。

卒業にあたり、新しい人生への、希望に満ちた門出に胸膨らませている学生三名に、四年間学んだ学生生活を振り返り、現在の心境及び感想等を語っていただきました。

『四年間を振り返って』



『感謝を次の目標へ』



文学部中国文学科

渡辺裕子

「四年間なんてあっという間だよ。入学当時、周りの人から口うるさく言われた言葉です。その言葉通り毎日が足早に過ぎ、気付けば卒業を迎えてしまいました。大学生はどこか解放的で、だからこそ自分自身の在り方が必ずどこかで問われてくる。当たり前ながらそれまでの学生生活とは全く違っており、新しいことの連続、めまぐるしい環境の変化に戸惑うことも多かったです。」

ですがその中で出会った人々、様々な経験によって受けた刺激は、私自身を大きく変えた要因であり、何にも代え難いものです。

四年間、中国語に限らず様々な授業を受けましたが、どれも先生方のカラーがあり非常に興味深いものばかりでした。中国語の授業一つとっ

ても、実践的会話を繰り返したり、単語一つ一つの意味を深く掘り下げて下さったりと、様々な観点から「中国」という国の文化を知ることが出来ました。また、二年間受けた図書館司書課程の授業では、日々飛び交う「情報」がどんな所でどれだけの人が携わって私達の元に届いているのか、という知識を現場で実際に見て得ることが出来ました。それに生涯学習の授業では、「学習」が私自身にとつてどうあるべきなのか考えるきっかけにもなりました。どれも一点に絞っていただけでは知ることの出来なかつた、本当に貴重な経験です。

こういった様々な気付きの中で、

中国という国を自分の目で見てみた

いと強く感じるようになった私は、資金を貯め、二年次の春に北京大学の短期研修に参加しました。もともとあまり積極的な性格ではなかつた私、しかも初めての海外旅行に等しい状態で参加したのですから、今思えばこれが一つの転機です。当時は、学内でも初めてのオリンピックを終えた冬の北京研修。一方で、冷凍餃子など食品問題によって日中関係が揺らいだ後でもありました。私の中にも偏見がなかつたとは言えませんが、だからこそ現地地足を踏み入れたことが大きかったです。お節介な

くらい親切なおじさん、毎朝朝食と共に声をかけてくれたお姉さん、日中関係について生の意見を懸念に伝えてくれた現地学生。間接的にしか知らなかつた中国という国は、私の中でいつの間にか、出会った人達そのものとなつていました。国境や言葉の違いの前に、まずは交流したいという思いを臆さずに伝える。それが何より重要だつたと感じます。

帰国してから参加し始めた学内の国際交流サポーターも、非常に嬉しい出会いの場でした。価値観の違いはもちろん、学習に対する姿勢や友人を大切にするあたかさなど、サポーターという名目でありながら、実際は留学生から学ぶことがほとんどです。それに比べ私の中国語レベ

ルは極端に低く、会話はいつも留学生の日本語に頼っている状況です。四年間学んでまだ身についていない。卒業後も学習は続けていきたいです。最後になってしまいました。ゼミナールで二年間指導していただいた酒井淳吉先生に、心から御礼申し上げます。先生の繊細な言語解釈、言葉の一つ一つにその時々のストーリーにあつた日本語を当てはめていく技術に、何度も何度も感銘を受けました。卒業研究においても、現代小説の言語表現について理解を深めたかったため、酒井先生に指導していただいたことが何よりも嬉しく、私にとつて幸せなことです。

そして、私が様々な悩み、壁にぶち当たったり、くよくよと下を向く度に徹を飛ばし支えてくれた友人、先輩家族にもたくさんのおりがとうを届けたいです。傷つけてしまったこともあつたかもしれませんが、皆の笑顔に支えられてここまで歩んで来ることができた心から感じています。

私の学生生活に携わって下さったすべての方に対する感謝の気持ちを忘れず、次の目標に進んでいきたいと思ひます。



『二松学舎での出会い』



国際政治経済学部

島村麻依

思い返せば四年前、私は熱い思いを持たずに二松学舎の門をくぐりました。けれども入学したからには母校となる大学のことをよく知りたいと思ひ、私は積極的に学部や教職の勉強、部活に取り組みました。それらの活動を通じ、多くの素晴らしい先生方や友人と出会つたことで、私は大きく成長できたのだと思ひます。

大学生活の中心はやはり、勉強でした。一・二年次は必修科目が多く、幅広い分野の講義を受けることで教養が身につきました。私は国際政治経済学部所属しながら、その専門の一つである経済学を苦手としていましたが、授業外の時間にも基礎的な部分から丁寧に教えてくださる飯田先生に経済学を学ぶうちに、苦手意識をなくしながら勉強を深め

ていくことが出来ました。また、ただ単語の意味を暗記して読み解いていた英語も、小林先生の授業を受け、表面的な部分だけではなくそれぞれ単語には深い意味や繋がりがあつたことを学び、試験等をこなすための英語力ではなく、実際に英文を読み解く際に必要な力を養うことができました。

三・四年次は、入学以前から興味を持つていた法律分野を中心に学び、知見を深めました。具体的な体験談やクイズ形式の小テストをまじえた中山先生の法学の授業で法律に対する興味が強まり、丁寧な解説で進む長谷川先生の憲法の授業で法律の根幹を学びました。法律に関するどの分野も魅力あるものに感じましたが、私は、その中でもより私生活に身近

な民法の研究に取り組みました。一年後期の基礎ゼミから民法を専門としていた土屋先生のゼミに入り、四年間、細やかに指導して頂きました。ゼミでは物権や相続など、民法に関する様々な勉強をしましたが、私は家族法に興味を持ち、特に卒業論文では生殖補助医療と家族の在り方との問題を研究しました。人生経験の少ない私は物事を多方面から見ることで、卒業論文を書くにあたって行き詰ることが多々ありました。その際、何度も土屋先生に助言を頂きました。ゼミを通して、専門分野の知識だけではなく、広い視点で物事を考察する力も養うことが出来ました。

学部の勉強と平行して、私は教職課程も履修していました。一・二年次のうちは、まだ実感としてなかつたため勉強は順調に進みましたが、学年を重ねると専門的な内容や実習を体験する三・四年次になると、教職に進むことに思ひ悩むようになり、その時々私を救って下さったのが、松葉先生です。人一倍心配症で緊張しやすい私に叱咤激励して下さりました。松葉先生の温かいお言葉を胸に、教育実習や採用試験の勉強に自信を持つて取り組むことができました。また、共に教職を志す友人たちの存在もとても大きなもの

でした。周りが就職活動に励む姿を横目に焦ることもありましたが、そのような環境の中でも落ち着いていられたのは、教職の仲間のおかげです。

大学生活の思い出の中には、勉強ととも一つ、部活があります。吹奏楽部の活動は、勉強面ではなかなかに進められている時に、少し離れた場所から自分を見つめなおすことのできる場になっていました。部活で出会つた友人は、学部で勉強しているだけでは決して接する機会はなかつたと思ひます。同じ思い出を持つ友人たちを、この先も大切にしていきたいです。

多くの素晴らしい先生方や友人に出会うことができたのも、二松学舎に入学したおかげだと思います。私を大きく成長させてくれた二松学舎を誇りに、社会人として頑張ります。





大学院文学研究科長 針原孝之

少年時代新聞記者になることを夢見ていた私は新聞社の企画する豆記者に参加したり、新聞記事を書いたりしていた。しかし、大学進学の時、母のことばによつてはかなくもう消されてしまった。「新聞記者にだけはならないでね」。このことばに大きな打撃を受けた。私は母と教員になることを約束して友人と上京した。



教職支援センター長 松葉幸男

四十五年前、学園紛争が始まったばかりの頃に、私は、ストライキで学内に立てこもっていた学生を排除した機動隊に囲まれて入学試験を受けました。そして、入学はしたものの大学はストライキで授業はまったく行われていませんでした。五月の終わり頃ようやく開かれた学生大会で、夜中の一時過ぎに、ストライキ解除の提案に賛成する二千人以上

大学には高校の国語の先生の同級生が助教授でおられた。困った時は先生の所へ相談に行くようにと言われていたが三年の時まで研究室を訪ねることはしなかった。

一年の夏休み後、クラスの友人に誘われて唐詩論講会に入り漢詩を鑑賞した。二年の時は論文集のまねごと『学究』と名づけたレポート集をがり印刷で発刊した。学生七・八人の集りであったが、

私も仲間に入れてもらい得意げにその雑誌をいろんな所へ送付して悦んでいた。日本文学の研究を進

の学生が黄色い投票用紙を一齐に打ち振ったため、会場全体が黄色い波で揺れていた光景がいまだに目に浮かんできます。

そのときから二年半ほどは穏やかな学生生活を送ることができました。この間に、心理学を専攻してジャーナリストになるために入学したにもかかわらず、教育学を専攻して高等学校の教員になることに進路を変更してしまいました。高校生のときに読んでいた『性格』（宮城音弥著・岩波新書）という本の中にあつた精神分析学に興味を持ち、関連する本を手当たり

私の学生時代

めている私の第一歩はこの時だったと思う。

卒業論文の提出予定の先生が新しく研究室を開かれた。その先生の指導されている源氏物語研究会や伊勢物語研究会・東歌研究会に入り忙しい学生生活を送った。卒業論文は「七夕伝承の発生と展開」と題し七・八十枚書いた。先生は「実証的なものにするため足でかせげ」と言われた。

私はこのことばを忘れない。学問は読みにはじまつて読みを終るといわれるが、実地踏査の重要性を教えてくださった。

次第に読んでいました。そのため、大学では心理学を専攻したいと考えるようになり、二年生になったとき、教育学概論という科目を選択しました。これまで自分の心に向けていた関心を、自分以外の人や社会に向けてきつかけになった科目です。この科目のお陰で、三年次には迷わず教育学専攻に進みました。教育学を学んだ結果として、「理想的でない教師が、理想的でない環境で、理想的でない子供に、理想的でない教育をしているのが現実ではないのか」とい

また就職試験は出身地である富山県の教員採用試験を受けた。運よく合格したが、もう少し東京で勉強を続けるようにという先生のことばによつて進むべき道は変わった。両親は富山で教員になるものと思つていたのでさぞがっかりしたことであろう。今ふりかえつて見ると道を間違えたのかも知れない。故郷に教員として帰つておればもっと楽しい生活を送つていたかも知れない。

大学時代良い友人に恵まれて有意義な大学生活を送つたことは有難いことであつた。

う疑問が生まれ、その答えを求めて教員になろうと決意しました。幸い（？）四年生になると同時に再び学園紛争が起きて卒業するまでストライキが続くという状況になっていました。十月の採用試験受験と一月の卒業論文提出に集中することができましたが、私の大学生活は、実際に通学した期間が二年半で、四年制大学を卒業したとは思えないような状況でした。その中で、自分が本気で取り組んだ勉強は、卒論と教員採用試験だつたように思います。

卒業生のご父母の皆様におかれましては、お子様たちのご卒業を心よりお喜び申し上げます。

新たな進路が決まった卒業生の皆様は、それぞれの道で更なる成長をさせていただくことを心よりお祈り申し上げます。

一方で「就職氷河期」の再来により、進路未定のまま卒業せざるを得なかった方たちにつきましては、キャリアセンターでは卒業後も継続して支援してまいりますので、遠慮なくご利用ください。

また、国および自治体等が実施している各種「新卒者支援プロジェクト」につきまして、卒業生たちには卒業発表時および卒業式当日に紹介しておりますが、ご父母の方でも関心がございましたら、キャリアセンターにご相談ください。さて、前回お知らせいたしました、文部科学省の支援による就業力育成支援プロジェクト「就業力一ホップ・ステップ・ジャンプ」が本格的に始動し、春休みを利用して一・二年生を対象とした講座を開講しました。

「キャリアデザイン講座」では今までの振り返りを行いながら、自己分析をし、将来を考えていくことを目的とした内容で、一年生・二年生ごとに実施しました。

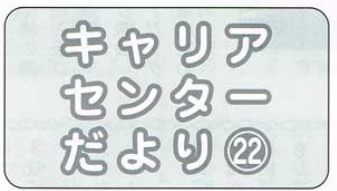
また、「就職キャリアUP講座」では、一・二年生合同でコンビ二エンスストア経営シミュレーションソフトを利用して、「人・物の流れ」について実践的に学ぶことを目的とした内容でした。

両講座ともに、受講生は「目から鱗」「この時期に受講したことで、新年度からの学生生活が楽しくなりそう」という声が多くありました。この講座は二十三年度の夏にも開講します。

さらに四月からは、全学生を対象に、ポートフォリオを導入して、キャリアのみならず学生生活全般を全学的にサポートしていく体制を築いていきます。

現在、キャリアセンターの窓口には、三年生（新四年生）が連日、履歴書・エントリーシートへの添削・模擬面接などに訪れています。

窓口を訪れる学生たちは、大きく三つのタイプに分かれます。一つ目は「自分なりに頑張ったことを確認に来る」タイプ。自己分析・企業研究など自分なりに取り組む、最終確認としてキャリアセンターを訪れる学生です。大変頼もしく、安心してみていることのできる学生です。二つ目は



「いろいろな考えすぎて迷路に迷い込んでしまった」タイプ。十月から就職活動に取り組み、様々な場所で行っている意見を耳にし、また思うような結果が出ずに右往左往するうちに自分を見失つてしまい駆け込んでくるタイプです。このタイプの学生も、私たちは何も心配していません。一緒に考え、背中を押してあげると必ず良い結果が得られます。

困ってしまうのが「何も考えずにキャリアセンターに来る」タイプです。このタイプの学生が最近増えてきていると感じます。その中でも特に問題なのは、「キャリアセンターが何とかがしてくれないのではないか」「とりあえずキャリアセンターに顔を出してみれば面倒を見てくれるのではないのか」という学生です。

キャリアセンターでは全力で学生のサポートをしていきますが、自分のこれからの人生を丸投げされては、さすがに困ってしまいます。当然のことながら「自分の就職先は自分で切り抜く」という気概を持つてもらいたいです。まずは分からないなりに「自分の考え」を持つことが大切です。

それから、企業が採用時期を遅らせるなど、最近就職関連の報道が多くされていますが、これらは現在の三年生（新四年生）には当てはまりません。また、「卒業後三年以内は新卒扱い」という報道に、慌てて動かなくても良いのではなどと考えている学生も一部いるようですが、これらの恩恵（本当に学生のためになっているのか疑問を感じますが）を受けるのはほんの一握りの学生だけです。実際は、多くの学生が更なる厳しい競争をしていくことになるのです。

どんな制度になるにせよ、企業が採用したいと思う学生はいつの時代も変わりません。自分の考えを持ち、周りの情報・環境に流されず、必ず良い結果が待っています。マスコミの報道やプログラムの書き込みなどに惑わされず、正しい情報を自分の目で確認することが大切です。そして、就職活動状況をその都度キャリアセンターに報告・連絡・相談（ホウレンソウ）すれば、私たちは的確なアドバイスと支援を行います。キャリアセンターでは一人でも多くの学生に「気づき」を与えていきたいと考えております。

海外研修報告

「インド映画の現在」 国文学科 専任講師 松本 健太郎

昨年末の十二月十九日から三十一日まで、インドのムンバイおよびゴアを訪問した。今回の研修の目的は次の二点であった。第一に、ハリウッドを上回る年間映画製作本数を誇るムンバイを訪問し、当該地域における映画製作および映画受容の実情を視察すること。そして第二に、アントニオ・タブツキ原作、アラン・コルノー監督の映画「インド夜想曲（一九八九）」のロケ地であるゴアを訪問し、執筆中の論文「主人公の名をめぐるアポリアー——映画「インド夜想曲」を題材として」（仮）の基礎的な調査を実施することである。

ムンバイは、その旧名Bombayの頭文字をとり、ハリウッドに準じて「ポリウッド」とも称されるインド映画産業の一大拠点である。近年では映画「スラムドッグ\$ミリオネア」の舞台ともなった都市でもあり、作品中で描写されているように著しい経済発展を遂げつつある。私がムンバイを訪れたのは十数年ぶりであったが、その間にインド映画もその地域的特色を保持しつつ、また進展するグローバル化の影を移しハリウッド映画の撮影技法を移植し



National Gallery of Modern Art の前で

ながら著しい進化を遂げており、その現況を確認できたことは大きな収穫であった。私は担当講義でインド映画を扱うこともあるので、今回の視察は今後の教育活動に資するものであったといえる。

今回の研修における最大の目的は映画「インド夜想曲」のロケ地の調査であったが、ムンバイ滞在の後ゴアに移動し、オールドゴアのボム・ジェズ教会、新市街のパナジ教会、マンドウビー、フォート・アグアダなどの各所を訪れ、論文執筆のための資料を得ることができた。

春らしい陽射しとともに、大学のキャンパスにも新しい季節がめぐってきました。

学生相談室

だより 72

カウンセラー 松平 友見

現在在学中の人の多くは、実際に利用したかどうかは別にしても、それまでの学校にスクールカウンセラーがいた世代です。大学の中でスクールカウンセラーの役割を果たすのは学生相談室ですが、そのサービス内容はより多岐にわたります。大学生生活での問題解決に必要な情報提供、カウンセリング、心理テスト、ご本人に関わる教職員間の連携調整を行うほか、授業の空き時間に誰もが好きなことをして過ごせるフリースペースや精神科医による相談も提供しています。

大学生活では、それまでの学校生活のようにいつでも同じクラスで同じメンバーで授業を受けるわけではなく、自分の関心にもとづいて時間割や友達を作り、部活・サークル活動やアルバイトをすることがどうかを決めていく必要があります。この自由度の高さには大学

生ならではの気楽さがある一方、自己責任の重さも伴っており、人によっては自由であることに戸惑いや不安を感じる人もいます。その具体的な内容も表現もそれぞれで、よく聴いていると一人として同じ人はいません。このような学生生活上の気がかりにきめ細かく対応するために、学生相談室のサービスも拡充を重ねてきました。また、このような気がかりには、意図的ではなく、その人の個性がすでに色濃く反映されています。この個性が「自分らしさ」の核であり、学生相談室に来る人が悩みながら成長するために大切にすべきもの一つです。相談の中で現実的な問題解決の糸口をともにたどりつつ、常にその人の個性にも関心を向け、その展開を妨げないように半歩下がって寄り添うことが学生相談室の基本姿勢です。

これから相談に来る人が自分らしく成長する過程をささやかながらともてできることを祈っています。

に感じられます。

国文学科四年 木村 美耶子

《津村ゼミナール》

私たちが所属している津村ゼミでは師である津村禮次郎先生の指導のもと、古典芸能である能を中心に研究に励んでいます。能舞台の構造や能の歴史、「風姿花伝」などの基礎知識はもちろんのこと、時には実技も行っていきます。

津村先生は国内に留まらず海外公演も行っている現役の能楽師であり、古典に留まらず新しい表現形態を積極的に取り入れる作品作りの活動も行っている方です。普段はとても温厚で優しい先

《大藏ゼミナール》

私たちが所属する大藏ゼミでは、古典芸能の狂言について学んでいます。大藏ゼミは特徴が二つあります。一つ目は実技が中心ということ。前後期ともに小舞と狂言を指導していただきます。特に後期では、研究発表の演目が中心となります。独特な言い回しや動作など難しいことも多いですが、一人一人が細かく丁寧な指導を受けることが出来ます。私たちのゼミは、先生が舞台の時には休講になっ

てしまうことがありますが、先生が舞台の時には休講になっ

ゼミ探訪

生です。そのお人柄もあり、先生と学生の距離はとて近く意見や質問がしやすい雰囲気でもとて和気あいあいとしたゼミです。

合宿などはありませんが、先生出演の作品は招待して頂く機会が非常に多い為、実際に能を鑑賞するなど、舞台を肌で感じる事が出来るのは貴重な経験です。公演終了後の授業では感想や意見の交換、作品の裏話を聞くことも出来る、非常に興味深い内容となります。能に使う装束や面（おもて）など、普段では近くで見ることの出来ない道具などを持つが、その時は自主練習としてゼミ生だけで練習を行ない、親睦を深めています。二つ目の特徴は、自分自身の成長を感じられることです。最初はセリフを言うことに一生懸命になってしましますが、回を重ねるごとに細かいところにも気をつけることが出来るようになります。

今年度は二月九日に研究発表を行いました。授業時と異なり、中洲講堂という広い場所でゼミ生以外に観ていただくということは、とても緊張しました。また、浴衣と袴を身に付けることに慣れていなくて動き

つてきて実際に見ることや触る機会もあるのが、驚きと発見の連続です。

そして、津村ゼミ最大の特徴は卒業発表会です。卒業論文の際は論文として提出する学生もいますが、学生自身で能の脚本と演出を考へるといった卒業制作をする学生が多いです。制作した能は毎年、中洲記念講堂で行われる卒業発表会にて実際に披露します。今年度は二月九日に実施し、四つの作品を披露しました。

能について理解を深めただけでなく、普段では出来ない貴重な経験が多く出来るので古典芸能をより身近に、というところもあり、不安を感じていました。しかし、舞台上がって演じている内に、徐々に楽しくなってきました。共に指導を受けてきた仲間が同じ舞台上にいる、ということが不安を和らげ、先生に指摘されたことに気をつけながら演じることが出来ました。半年間積み重ねてきた成果を発揮出来たと感じています。来年度の研究発表も楽しんで演じることが出来るように、「日々の積み重ね」を大切に授業に臨みたいと考えています。

文学部国文学科 皆川 典子
舛田 憲代



学生顕彰報告

- 書道(個人)
 - 新井千聖さん 第二十七回読売書法展 入選
 - 小島藍さん 第二十七回読売書法展 入選
 - 木谷浩乃さん 第二十七回読売書法展 入選
 - 近藤詩織さん 第二十七回読売書法展 入選
 - 平山理恵さん 第二十七回読売書法展 入選
 - 久保恵美子さん 第九十五回書教展 読売新聞社賞 第十五回全日本高校・大学生書道展 優秀賞
 - 佐藤友紀さん 毎日書道展 U23 入選
 - 大川戸華さん 毎日書道展 U23 入選
 - 小竹絢子さん 毎日書道展 U23 入選

課外活動団体助成報告

- 今涉さん 毎日書道展 U23 入選
- 創玄展 入選
- 短歌(個人)
 - 青木美穂さん 第五十四回千葉県短歌大会 地賞
- 劇団こんにちはシアター 「二〇一〇年秋公演」への学外発表 会場借用助成。
- 狂言研究会 「狂言研究会第三十一回自演会」への学外発表会ポスター印刷助成。
- 吹奏楽団 「第十七回定期演奏会」への学外発表会ポスター印刷助成。
- 書道部 「第四十五回二松学舎大学書道部書道展」への学外発表会ポスター印刷助成。

平成二十三年度地区別父母懇談会について、今回の『父母会報』で日程等ご案内する予定にしておりましたが、大学の学年暦の変更に伴い、開催日及び開催地について検討しております。次号の『父母会報』とホームページでご案内いたす予定です。ご了承のほどお願いいたします。

定期総会

平成二十三年度 父母会定期総会開催について

左記の日程で、平成二十三年度二松学舎大学父母会定期総会を開催いたします。

当日は、講演会を予定しております。

日時・平成二十三年六月十八日(土) 場所・九段校舎

内容・平成二十二年度事業報告並びに決算

- ・平成二十三年度事業計画並びに予算

一年次生〜三年次生の会員の皆様には、平成二十三年度定期総会のご案内と出欠票(委任状)を父母会報第七十二号に同封しておりますのでご確認ください。また、準備の都合上、ご出欠を同封の出欠票(委任状)で六月十日(金)までにお知らせいただきますようお願いいたします。

なお、定期総会資料につきまして、五月中旬に送らせていただきます。



編集後記

卒業生のご父母の皆様、お子様のご卒業おめでとうございます。今回は、卒業パーティーが中止となりましたが、三月二十五日に卒業証書を受け取った卒業生皆さんの笑顔の写真を、紙面の許す限り掲載させていただきました。

さて、この世界経済の激動により学生の就職活動は、依然として厳しい状況が続いています。今、学生達は行き詰まりながらも、一つひとつの課題に挑戦し、努力と執念で勝利に向かって戦っています。

先日、就職体験記のようなものを読んでいたたら、就活を通してなにより学んだことは「諦めない心」だと書かれていました。弛みなき努力の積み重ねほど強いものはありません。卒業生のお一人お一人が、苦勞したことを自身の糧として社会貢献の使命に燃えて、実力を存分に発揮して下さることを心よりお祈り申し上げます。

最後に今後も父母会としては、大学と密接な連携を図り、引き続き皆様のご協力をお願いしながら、学生がより充実した生活を送れますよう心がけてまいります。

本年一年間、大変ありがとうございました。